

第三十課

聖なる祭司

とりなしのみわざ

「聖なる祭司として、イエス・キリストを通して、神に喜ばれる霊のいけにえをささげなさい。」

「あなたがたは主の祭司となえられる。」

(イペテロ二・五)
(イザヤ六一・六)

「神である主の霊が、わたしの上にある。主はわたしに油をそそがれた。」これは、イザヤ書にあるイエスのみことばです。みわざの実として、すべて贖われた者は祭司であり、大祭司としてのキリストの油注ぎにともにあずかる者です。「それはひげに、アロンのひげに流れてその衣のえりにまで流れしたたる。」アロンの息子たちのように、イエスの体のすべての肢体には、祭司になる権利があります。しかし、だれもが祭司としての権利を行使しているわけではありません。多くの人は、依然として、全くそれについて知りません。しかし、それは神の子にとつての最高特権であって、「いつも生きていて、とりなしをしておられる」方に近づき、その方に似る

一番のしるしです。そうだと思いますか。祭司とは何かを考えてみてください。

まず第一に、祭司の働きがあります。これには二つの面があり、一つは神に向かい、もう一つは人に向かっています。「大祭司はみな、人々の中から選ばれ、神に仕える事がらについて人々に代わる者として、任命を受けたのです」(ヘブル五・一)。あるいは、モーセによって言われた次のことばのとおりです。「そのとき、主はレビ部族をえり分けて、主の契約の箱を運び、主の前に立つて仕え、また御名によって祝福するようにされた」(申命一〇・八。二一・五、三三・一〇、マラキ二・六等)。一方では、祭司には神に近づいて神の家に神とともに住み、神の御前にいけにえの血や香をささげる力がありました。しかし、祭司は、この務めを自分のためではなく民の代表としてしたのです。これが祭司の働きのもう一つの面です。祭司は民からいけにえを受け取り、神の御前にささげ、そこから出て来て、御名によって民を祝福し、神の恵みの保証を与え、神の律法を教えました。

このように、祭司は全く自分のために生きない人です。祭司は、神とともに、神のために生きます。祭司の仕事は、神のしもべとして、神の家と、神の名誉と、神の礼拝を守り、人々に神の愛とみこころを知らせることでした。祭司は人々とともに、また人々のために生きました(ヘブル五・二参照)。祭司の務めは、民の罪と必要を見出し、それを神の御前に持って行き、民の名によっていけにえと香をささげ、民のために罪の赦しと祝福をいただき、出て来て御名によって民

を祝福することでした。これこそ、すべての信者の高貴な召命です。「それは、すべての聖徒の誉れ」です。信者は、自分の周囲にいる滅び行く何百人もの人々の中で神の祭司となるという一つの目的をもって贖われました。信者は、大祭司イエスにならって、自分の周囲にいる人々のために、神の恵みの奉仕者、また管理者とならなければなりません。

次に、祭司の働きに見合った祭司の歩みがあります。祭司は、神が聖くあられるように聖くなければなりません。これは、すべて聖くないものから遠ざかることだけではありません。神に對して聖くなること、すべてをささげて神のみこころのままになることを意味します。この世から離れて神にのみつくことはいろいろな方法で示されました。

まず、祭司の衣にそれを見ることができました。神の御指示によって作られた聖なる衣は、神のものとして区別されました（出エジプト二八章）。それはまた、死や汚れたものから遠ざかって、特別に聖くなるようにという命令にも見ることが出来ます（レビ二一・一二）。一般のイスラエル人に許されたことでも、祭司には許されないことがありました。それはまた、祭司の体には、欠陥や傷があつてはならないという命令の中にも見ることが出来ます。肉体的な完全は、神の奉仕における完全と聖さのひな型でありました。それはまた、祭司族は、他の部族のように相続財産を持たないという取り決めにも見ることができました。神が彼らの相続財産となるべきでした。

祭司の生活は信仰の生活でした。神に献身し、神のために生きるだけでなく、神に頼って生きる

べき生活でした。

これはすべて、新約時代の祭司がいかにあるべきかの象徴です。神に対する私たちの祭司としての力は、私たちの個人生活と私たちの歩みにかかっています。私たちは、イエスが、「その衣を汚さなかつた者」と言われた者たちのように歩まなければなりません。

この世からの分離において、他の人々には合法的に見えるものをささげる時にも、私たちは、主に対して聖くあらうとする自分の献身が真心からのものであり、完全なものであることを証明しなければなりません。祭司の肉体的完全さは、私たちが、「しみや……傷のない」「すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた」「何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者」となることです（レビ二一・一七—二一、エペソ五・二七、IIテモテ三・一七、ヤコブ一・四）。

それどころではありません。私たちは、この世の財産をすべて放棄することに同意します。すべてを捨てることは、キリストのように、神のみを自分のものとすることです。何も持たないようですが持ち、神のためにすべてを所有します。これが本当の祭司のしるしであり、神と同胞のために生きる者の姿です。

次に祭司への道があります。アロンについて、神はその息子たちがすべて祭司となるようにお選びになりました。アロンの息子たちの全員が、生れながらの祭司でした。しかし彼らも、聖別という特別な神の定めなしには務めにつくことができなかったのです。神の子たちはすべて、生

れながら、大祭司の血統として祭司です。しかし、それだけでは十分ではありません。自分の聖別に同意し、それを実現して初めて、その力を行使できるのです。

アロンとその子供たちの儀式は次のように行われました（出エジプト二九章）。身を洗い、服を着ると、聖なる油が注がれました。それから、いけにえがさげられ、その血を右の耳と右手と右足につけました。そして、祭司と服には、ふたたび血と油がいっしょに注ぎかけられました。神の子供もこのように、聖い祭司としての力を働かせるために、すでにあずかっている御血と御霊の恵みにいっそう深く入るのです。こうして、御血は、卑しいものを取り除き、御霊はふさわしくないものをすべて取り除いてくださるのです。

祭司に血をつける時に、何が新しくなっているかに注目しましょう。祭司が、自分も罪を犯した者として自分の罪のためにいけにえを携えて行き、罪の赦しを求める時には、血は祭壇に注がれるのであって、人ではありません。しかし今、祭司の聖別にあたっては、血とより密接に結びつく必要がありました。耳と手と足が特別な行為によって血の力のもとに置かれて、すべてが神のものとなり、聖別されたものとなります。恵みの座に注がれた血が、ただ赦しのためのみと思つて満足している信者が、祭司として完全に神に近づく道を求めるようになると、「罪を意識しなくなる」までに、心にある罪の意識をきよめるために注がれる血の力を、もっと完全に絶えず経験することを求めるようになります。そのことを経験するようになると、意識は目覚めて、

最も親しく神に近づく特権、また、自分のとりなしの祈りが受け入れられるという完全な確信を抱くようになります。

御血は私たちに特権を与え、御霊は力を与えて、信仰のとりなしの祈りにふさわしい者としてくださいます。神は私たちのうちに祭司の霊を吹き込んでくださり、神の栄光とたましいの救いのための愛を燃え上がらせてくださいます。神が、私たちをイエスと一つにしてくださいるので、御名による祈りは現実のものとなります。神は私たちを強くして、信仰の祈り、執拗な祈りをさせてくださいます。クリスチャンがキリストの御霊に満たされれば満たされるほど、自発的に祭司としてのとりなしの祈りに献身するようになります。愛するクリスチャンの兄弟たちよ。神は、御自身に近づいて御前に生き、とりなしの祈りによって神の恵みの祝福を他の人にもたらし祭司を大いに必要としておられます。世は、滅び行く者たちのために重荷を負い、彼らのためにとりなしてくれる祭司を求めているのです。

あなたは、この聖いみわざのために喜んで自分を捨てようと思われませんか。あなたは、それが要求している献身をよく知っています。すなわち、それは、キリストのようにすべてをささげ、神の愛の救いの目的が入々に成就することを要求しています。救われている者なら、ただ自分が燃えて生き生きとすることだけを求めて満足するような者にならないようにしましょう。完全に、ただ祭司として自分をささげることが妨げるものがありませんように。いと高き神の祭司と

なることに勝るものではありません。卑しさや不適格さが妨げとなりませんように。御血にある完全な贖いの客観的な力があなたのうちに働きます。御霊にあつて、神のいのちとしての完全に主観的な個人的体験がもたらされます。御血は無限のふさわしさを提供し、あなたの祈りを一番受け入れられやすいものにしてくださいます。御霊は神のふさわしさを与え、神のみこころに従つて祈ることを教えてくださいます。祭司はだれでも、聖所のおきてに従つていけにえをささげる時には、それが神に受け入れられることを知っていました。御血と御霊におおわれて、あなたは、イエスの御名による祈りに対するすばらしい約束があなたのうちに成就する、すばらしい確信を持つことができます。神の大祭司として、結びつく時に、「何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます」。あなたは、働く大きな力があるという義人の祈りをする力が与えられます。世に対する教会の一般的な祈りに加わるだけではなく、あなたが置かれた場所で特別な祈りの働きをすることができるようになります。祭司として神に申し上げ、その答を知り、答を受け、御名によって祝福を与えます。兄弟よ。ためらうことはありません。祭司になりなさい。祭司だけになって、祭司として徹底しなさい。自分がとりなしの祈りの務めに聖別された者であることを意識しつつ、主の御前を歩みなさい。これこそ、神の御子の像に一致する真の祝福です。

恵み深い大祭司よ。私のたましいは、あなたのメッセージに応答するものです。どうか、この献身を受け入れてください。私は、あなたの聖徒たちが聖なる祭司であること、私もまた祭司であって、力を帯びて御父の御前に出なければならぬ者であることを信じます。また、私のまわりにいる滅び行く人々に祝福をもたらす効果ある祈りを信じます。

私は、すべての罪から私をきよめ、私に対する完全な確信を私に与え、私のとりなしの祈りは聞かれるという信仰の完全な確信へと導いてくださるあなたの御血の力を信じます。

私は、私を聖別し、祭司としての召命感に満たし、たましいに対する愛を与え、神のみこころに従うことはどのようなことを教え、信仰の祈りの仕方を教えてくださる、大祭司であるあなたから毎日注がれる御霊の油注ぎを信じます。

私は、私の主イエスが私の生活のすべてとなってくださいるように、私の祈りの生活における保証人となってくださいること、あなたのすばらしいとりなしの祈りのみわざにあずかせてくださることを信じます。

この信仰によって、私は、きょう自分自身を、神の油注がれた祭司としてささげ、罪人たちのために御顔の前に立つとりなしの祈りをささげ、そこから出て行って御名による祝福を与えま

す。

聖なる主イエスよ。私の献身を受け入れ、保証の印を押してください。主よ。どうか御手を私の上に置き、あなたのみわざのために私を聖別してください。人々の中を、いと高き神の祭司としての意識と品性をもって歩ませてください。

私たちを愛し、御自身の血によって私たちをすべての罪から洗い、私たちを神につける王とし祭司としてくださった方に、栄光と支配がとこしえまでもありますように。アーメン。